

ものたましい ―物質としてのもの、たましいとしてのものの制作研究―

大阪芸術大学 教養課程 准教授 加藤隆明

今回の研究制作は、有機質素材を使用した作品を生体素材という視点だけでなく、たましいという概念から行いたいと考えました。

たましいという考え方の基本には、美術のコンテクストにみられる物質と人間の関係や客体化した物体ではなく、人間と地平を同じくするものの世界観を表現としたいと考えていました。美術のコンテクストは西洋哲学の思想でもあると考えていたので、たましいはそのコンテクストとは大きく異なると考えていました。

私の制作に大きな影響を受けた芸術運動は「もの派」でありました。同時代に類似する芸術運動があり例えばイタリアの「アルテ・ポーヴェラ」、そしてアメリカの「ミニマルアート」がそれでありました。

私がもの派の作品から体験したことは、ものとは何、もののありようとは何かという問いであったと思います。今までの芸術体験とは明らかに異なる不思議な鑑賞体験を感じました。

もの派とされる作品群の形態は多様でした。共通にあるものは「作らない」ということです。

作品を構成している素材は、彫刻の一般的な素材です。木材、鉄、石などまたガラス、綿、布、紐、土などで、それは原初的な素材から日常的に身の周りにある素材でもありました。素材だけでなく場所や窓枠など展示する場所とも作品と密接にありました。

1970年代の社会的現象であったエントロピーに対する注目や環境保護の影響で「作らない」という制作スタイルが発生したとも考えています。

もの派は、西洋の人間が自然を支配する考えや素材に人間の世界観を映し出すそれまでの芸術作品の世界観と一変させました。人間がその物体を理解するためあるいは支配するために使用していた言語を取り除き、自然のありようの物体そのものを、体験する作品であると思いました。

じしんの経験として、もの派のものということばに注意を向けた時、カント哲学に「もの自体」というキーワードがあることに気づきました。非常に難解なカント哲学ではありますが、分からないなりに私は日本語訳にされたこのことばからもの派の作品を読み解こうと考えました。

「ものは人間の主観的認識により知覚されるがそれ自体は不可知でありもの自体の背後にあるものが真実である」と語られていました。もの自体は理解することはできないもの、その背後に真実性があるとは何か、これはことばにより人間に支配されたものではなく、我々の認識では捉えられない背後にあるもの、それを提示された作品で体験するということでしょうか。

ものということばを辞書で確認した時、もののけと

いう説明がでてきます。それは鬼とか妖怪とか人間にとって災いをおこす存在ではあります。その災いの存在に対し直接指し示すのではなく、ものということばで曖昧にしてその世界観を提示したとされているということです。ものの背景がそのような得体のしれない状態であることと、カントのものの自体ともの派の4もの解釈と繋がって見えます。

得体のしれない背景があるもの、そのような素材からオブジェクトとサブジェクトの関係に陥らない素材の選択が必要と考えてきました。

それにより選択した最初の素材が豚真皮です。その後殻セミ、真珠、毛皮などがあります。

2024年7月 artosaka2024 では蚕玉を素材にした作品10点程度を展示しました。今回は繭玉を全部で数千個使用し作品を構成しました。

繭はカイコから生まれるがカイコ自身は遺伝子操作により作られた人工生物でもある。成虫になると翅はあるが飛べず餌も食べない状態になる。

古事記には、スサノオに殺されたオホゲツヒメからいろいろな動植物が生まれるが、その一つがカイコである。カイコは日本神話から人工生物に至る膨大な物語がある。繭という有機的物質にはただ生体ということだけでなく、たましいという壮大な物語が人間との関係が密接である。それが選択の理由でもある。

制作に関して、繭玉を縦にふたつに割り内側に金箔や金粉をレジンで塗り込み、レジンを硬化させた繭玉を数千個繋げ、壁に展示するレリーフ的作品を制作している。

生命体を作る造形物をできるだけそのまま使用し、素材が持つ背景のオーラというべき印象を借り受けながら作品を制作している。私の使用するものは有機質で生命体との関連も強いので、ものの背後といわれるものは、もの派の素材とはかなり異なる。むしろ人間が強く関わることにより生み出される生物あるいはバイオミネラルというものが支配することを超えて人間とものが融合していく感覚に陥る作品を考えていた。ものの特性等を表現していくことは鑑賞者が作品と「同じ地平に存在している。人間の客体としてあるのではない」ということを提示したいと考えていた。

今回の制作研究はART OSAKA2024に出品した作品等が参考です。制作ノートでは制作過程とともに展示空間構成資料で報告します。